

# 資料館だより

第54号

平成24年(2012)  
10月15日 発行



平成24年度 企画展「村の暮らし～膳碗組合をとおして～」の展示風景より

ここに展示をしてあるのは、原山・橋場組で使われていた祝儀（ハレ）の席での膳碗類です。それぞれの席には、大小の高足膳に各種漆器類や皿類が配膳されています。手前には、三三九度の瓶子・盃・角樽を置き、煮物などを入れた七つ鉢（長方形の漆の入れ物）・伊万里の染付鉢や瀬戸美濃の取り皿類・青磁の水差し、朱塗りの大鉢などを使って、来客をもてなしました。寒い時期には、火鉢なども配置されています。

# 「村のくらし—膳碗組合をとおして—」

武蔵村山市立歴史民俗資料館 石川 悦子

## 1. はじめに

かつて自治会や町内会ができるまで、地域の人々が互いに助け合う一つのまとまりとして膳碗組合がありました。

資料館では、今年度5月、企画展「村のくらし—膳碗組合をとおして—」と題して、約1カ月間これらの各組合の道具類や文書資料の公開・展示を行いました。展示に先立ち、地域関係者の方々より話を伺うことができ、近・現代における武蔵武蔵村山周辺の人々の生活の一部を垣間見ることができました。新たな聞き取り内容も含め、改めて市内の膳碗組合についてご紹介します。

## 2. 武蔵村山のくらしと地域名

武蔵村山市は、狭山丘陵を背に、南側の山の根から青梅街道を中心にムラが開けていきました。昭和30年代以降の大開発が行われる前までは、人々の生活は丘陵に深く入り込んだ谷戸地域では水稲栽培を行い、南側に広がった台地の上では畑作による野菜や茶を生産し、他に養蚕や織物関係などを営むなど、多摩地域でよくみられる農村の形態をなしていました。

武蔵村山市に現存する地域名の多くは江戸時代に遡ることができます。記録によると、西から岸村・三ツ木村・中藤村（江戸時代後期に横田村が独立）の4つの村があり、地域内に各々にいわれのある地域名が付いていました。さらに細かく地域をみると、江戸時代からの五人組やイケやジレイなどでまとまった付き合いから発展して、隣組や組合、町内会や自治会など時代とともに、人々は互いに助け合いながら村のくらしを守っていました。大正6年(1917)の村合併による町制施行、昭和45年(1970)の市制施行より現在の武蔵村山市に至っています(図1)。

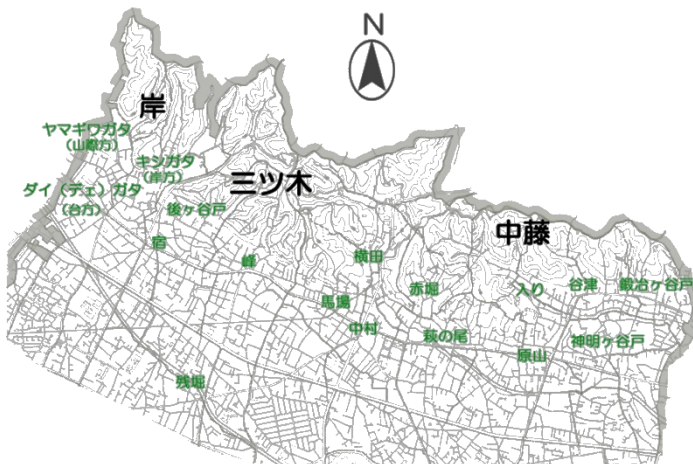


図1 武蔵村山市内の各地域名

## 3. 膳碗組合（膳碗組）

農業を中心とした忙しい日々の中で、人々が遊興を楽しむことは季節ごとの祭や諸行事などで、ほかに人が集まるとしたら、祝儀（ハレ）・不祝儀（ケ）の人寄せの時くらいでした。

この祝儀（ハレ）・不祝儀（ケ）などの人が集まる時における様々な準備や手配、会席に使用する皿・碗・膳をはじめとする調度品などを一軒の家庭でまかなうのは、容易ではありませんでした。そこで、近隣や親せきなどで仲間を募り合い、お金を出し合っって道具類を揃え、共有の財産として倉庫に収め管理をしていました。武蔵村山周辺では、この倉庫を「ゼンワングラ」・「ジュウモツゴヤ」などと呼び、その仲間うちのことを「膳碗組」とか「膳碗組合」などと呼んでいました。このような人々の付き合い方は、多摩地域のみならず、全国的にみられたようです。

## 4. 膳碗組合が所有するもの

組合では、土地を借り、6畳ほどの大きさの倉庫を建て、大量に購入した膳碗などの道具類を収納管理していました。造りは土蔵造り、板張り、モルタル造りなど様々でした。

組合では、地代を払い、膳碗の修理や補充、新調などのために組合費とは別に掛け金を毎月徴収していました。

蔵の中には、どこの膳碗組合でも同じような調度品や食器類が収められていました。武蔵村山市内の道具類の記録をみると、会席膳としての形態が保たれており、親碗・吸物碗・壺碗・平碗などの漆器類を中心に、大・中・小の各種皿類・湯のみ・徳利や盃類などが一通り揃えられ、婚礼用として、祝樽（エダル）・銚子・盃のセット、ウドン用の捏ね鉢・揚げ箸・キリダメといった武蔵野地域で人寄せの際に出される鯉鮓作りの道具類なども含まれていました。

これらの碗をはじめとする食器類は、主に30人前の単位で揃えられ、改めて新調する場合も30人前の単位で購入しています。そのほか調度品として、座布団、テーブル、火鉢、灰皿などが揃えられていました。

組合内では、「ゴシュウギは自分もち」、「トムライは組合もち」という言葉があるように、婚礼は家ごとの経済力で多様な規模で行われていましたが、葬式は、一定の形式を保つため、組合が援助することがあったそうです。

組合員は、道具が必要になると、碗蔵から道具を借り、その借り料を払いました。

組合の記録簿や集金帳には、当時の集金の日

付などがきちんと記載されています。

道具類の手入れについては、使用した家で壊した場合は、頻度によって修繕を行ったり、組合でまとめて行ったりしていたようです。漆器類などは、使う頻度により漆がはげたり、欠けたりするため、瑞穂や所沢など周辺の地域の職人が回って修理を行っていたそうです。

陶磁器の皿類が割れた場合は、継ぎなどをした様子がないため、その都度補充をしていたようで、当館に寄贈された陶磁器類をみると30人前で揃っている以外に、半端な数で揃っている皿類が多く見受けられます。

## 5. 祝儀（ハレ）・不祝儀（ケ）の人寄せ

祝儀（ハレ）・不祝儀（ケ）場では、訪問客へのもてなしとして出されるのが酒と膳です。

祝儀で盃を交わす酒は冷酒ですが、膳と一緒に出される酒は燗酒が主でした。酒は高価な嗜好品であり、毎日のように飲むことはなく、客たちは用意された酒を遅くなるまで飲んでたともいわれています。膳の上には、用意された料理が、それぞれの器に彩られました。

食材にも決まりごとがあり、祝儀には、レンコン、ゴボウ、そして吸い物用にハマグリが用意され、不祝儀の場合、肉を使うことはありませんでした。

代表的な料理としては、赤飯のほかに煮物（イモ・ニンジン・ダイコン・コンニャクなど）、白和え（ホウレンソウ・ニンジン・コンニャクなどが入る）、吸い物、仕だしの魚屋が納めた刺身や酢の物、ときには野菜の天ぷらなども出され、最後に必ずうどんが出され、カテ（ホウレン草やナスなどを茹でたもの）と一緒に食したそうです。また、折しも添えられ、膳の上に収まりきれないくらいのもてなしをしました。

## 6. 人寄せに関わった組合の人々

祝儀、不祝儀の際には、組合員にはそれぞれの役割分担がありました。主に、家の代表として家長が、手伝いに出向きましたが、女性も賄いなどに手を貸しました。

### i 男衆（オトコシ）の役割

表舞台に出ることが多い男性陣ですが、裏方の仕事もかなり力を発揮したようです。

椀蔵からの道具類の運び出しや調度品の配置、さらに勝手（台所）にも立ったそうです。振る舞いの最後に出されるうどんは、コシがある方が美味しいということから、男性がうどんを打ったそうです。さらに、大釜で茹でたうどんを引き上げる際には、ザルが熱くて重いため、男性の手が必要とされました。また、葬式では、

墓の穴掘り役であるアナバン（穴番）や棺の担ぎ手なども男性の重要な仕事でした。

### ii 女衆（オンナシ）の役割

もてなしの膳を用意するため、女性は裏方として準備が大変でした。

まず、その家の主人などから、現金を渡され、その予算内で献立を考え、食材などの買出しや魚屋への仕出しの手配などを行います。時には、当日の朝食を親戚などに振舞わなくてはならず、数日前から準備を始めたそうです。

男衆によって椀蔵から運び出された道具類を洗浄しながら、食材を調理しきました。

頭に手ぬぐいをかぶり、かっぱ着（前掛け）を着て、中心となる女性の采配により、手際よく料理を作り、盛り付けをし、順番に客に出し、下げられた食器類の片付けを行い、おかたの料理が出し終わるまで勝手（台所）中で動きまわりました。祝儀（ハレ）の席では、小学校高学年くらいの晴れ着を着た女子児童が、三三九度などの御給仕として立ち振る舞いました。

男衆、女衆共にそれぞれの手伝いが、ひと段落すると、酒や食事などをその家の家族からもてなされます。後日、手伝いのお礼として、家の主人から現金のほかに品物などを配られたりもしました。



図2 岸地域の膳椀蔵分布図

## 7. 各地域の膳椀組合の様相

膳椀関連資料として資料館では、市内各地域の膳椀組合関連資料が寄贈されてきました。また、平成7年から行われた市史編さん事業にかかわる民俗調査では、市民の方々の協力により数多くのデータを収集することができました（文献1）。市史の他にも多摩地域を中心とした調査がまとめられ、武蔵村山市岸の膳椀資料が紹介されています（文献2）。

### i 岸地域の膳椀組合（図2）

岸地域は、山際方（ヤマギワガタ）・台方（ガイ（デエ）ガタ）・岸方3つの地域に分かれます。

市史編さん事業に伴う調査によって、詳しく市史にまとめられています。それによると最盛期には、10以上の椀蔵があったといわれています。記録が残されている組合は、山際方の「マルヤマ組」・「アモク会」、台方の「フミオ会」の3組です。

#### マルヤマ組

マルヤマ組は、明治39（1906）年3月に結成されました。結成当初の記録である『膳椀買入月掛原簿』が現存しています（写真1）。

マルヤマという名称は、組加入者が岸のヤマギワ（山際）に集中しているため、ヤマの名前を付けたそうです。

結成当初の加入者は10軒でしたが、大正13（1924）年までに15軒になり、昭和30（1955）年には20軒に増加しました。

組は、福井イッケ（イッケー本家・分家などのつながりにある家々の集まり）と原田イッケが中心となって祀る福原稲荷講中が集まったもので、稲荷講による古い結びつきを有する家々による相互扶助的な意味合いが強かったようですが、結成当初より膳椀の共有とその維持管理を目途とした「ワンコグラ組合」と呼ばれていました。



写真1 マルヤマ組の膳椀蔵と道具類（個人蔵）

当初、膳椀類は個人の家に収納されていましたが、昭和30年（1955）にモルタル造りの蔵を建て、昭和40年（1965）には同じく岸にあるアモク組の膳椀蔵に隣接した場所に移転しています。平成以降、膳椀の使用機会もほとんどなくなり、平成4（1992）年に土地を地主に返却して解散しました。

#### フミオ会

フミオ会は、大正期に結成されました。当初は、福井姓・宮崎姓・小野姓で構成されていたため、それぞれの一字をとってフミオ会と命名されたそうです。

結成当初の加入者は12軒で、『膳椀連名簿』（大正7（1918）年3月）には「福宮大組合」あるいは「ふみを組」と記されており、その冒頭にある定則には「一本組合ハ村山村々長ノ命令以テ組織シ福宮大組合ト称ス」と記載さ、村長命で組織されたことが分かります。

昭和43（1968）年、名称を「中組」と改称しましたが、今でも「フミオ会」で通用しています。膳椀蔵は土蔵造りだったそうです。

平成5（1993）年8月、膳椀類を仲間うちで分配し、蔵は撤去されました。

#### アモク組

アモク会の結成時期は、よく分かっていませんが、昭和6（1931）年の『組合当番帳』が残っているため、その前後と考えられています。

アモク組に加入していた家々の多くは荒田姓・諸江姓・栗原姓で、それぞれの一字をとってこの名称がついたそうです。

記録は、第二次大戦前で途絶えており、戦後に解散したと考えられます。アモク組の膳椀蔵もフミオ会と同様に土蔵造りと伝えられています。

上記以外にも、戦後に解散された膳椀組合の道具の一部が、岸自治会館で管理され、自治会の行事などの時に使われていたそうです。当館に寄贈された「吸物椀 二十人前」「椿皿二十人前」と墨書された木箱には「明治十五年第十二月」と購入した日付も墨書されています。

### ii 三ツ木地域の膳椀組合（図3）

三ツ木地域は、宿・後ヶ谷戸・峰・残堀の地域に分かれています。残堀を除く、各地域に膳椀蔵がありました。

詳細な記録は残っていないため、よく分かっていません。

### ① 後ヶ谷戸の組合

後ヶ谷戸の膳椀組合について、詳細は不明ですが、近年まで自治会が道具類の管理を行っていたそうです。

### ② 宿の組合

宿は、西から上宿・中宿・下宿と3つの組があり、それぞれに膳椀蔵を所有していました。

詳細は不明ですが、その後、薬師堂のところに集められています。現在でも、薬師堂の裏に倉庫が存在し、自治会で管理をされています。

### ③ 峰周辺の組合

峰・油ヶ谷戸・小ヶ谷戸・桃の木とそれぞれの地域の個人宅の敷地の一角に、椀蔵がありました。

膳椀倉は、各地域すべて撤去されており、成立から解散に至る過程など詳細なことは分かりません。



写真2 桃の木の膳椀蔵

### ④ 残堀地域

残堀地域は、膳椀組合の存在はありませんでした。しかし、近隣の祝儀・不祝儀に使えるようにと、個人で膳椀類を所有し、さらに共同使用できるように膳・椀類・銚子・酒盃など用意していました。これらの膳椀類の裏面などには、**卍**の文字が入れています。残堀は、二十人前ずつ膳椀類を揃えており、他の地域に比べ、仲間内の規模が小さかったと考えられます。

### iii 中藤地域の膳椀組合 (図4)

中藤地域は、西から馬場・横田・中村・萩ノ尾・赤堀・原山・入り・谷津・鍛冶ヶ谷戸・神明ヶ谷戸の地域に分かれます。

膳椀組合の成り立ちについては、イケヤジルイといった血縁集団から成り立ったものが主ですが、ほかに原山のように、江戸時代の五人組制度の名残と考えられる組(オヤグミ(親組)、から変化をしいった地縁集団など、さまざまな過程を経て成り立ったと考えられています。

### ① 馬場の組合

馬場は、奥組(おきぐみ)・中組・東組の3つの組がありました。

#### 奥組(おきぐみ)

奥組(おきぐみ)内では、個々の家で人寄せ用の食器類を所持していたので、膳椀組合や膳椀蔵はなかったそうです。



図3 三ツ木地域の膳椀蔵分布図

#### 中組

中組では、組としての膳椀蔵は作らずに、人寄せがあると東組の膳椀蔵から借りていたとのことです。

#### 東組

東組は、長圓寺の南側の個人宅前に膳椀蔵が建っていましたが、現在は取り壊されています。

東組の膳椀組合は、昭和30年代以降、結婚式は、結婚式場で行われるようになり、家庭では行われなくなりましたが、葬式は、各家庭で行う習慣が残っていたため、昭和40年代後半ごろまで利用されていました。

### ② 横田の組合

横田は、江戸時代に横田村として独立していましたが、明治時代に中藤村に再編されたため中藤地域分として紹介をします。

横田には、田端組・金山組・入り組の3つ組がありました。いずれも膳椀蔵を所有し、組単位で共同管理していました。現在、組合は解散し、道具類は組合の仲間うちで分配され、膳椀蔵も取り壊されています。



図5 中藤地域の膳椀蔵分布図

(地域名と組合名とワングラ ▲)

### ③ 中村の組合

中村は、古くから組単位で共同管理していたようで、2組の膳椀組合があったことが分かっています。

市史編さん時の調査では、1軒は個人宅に残っていたこと、もう1軒は使用中に火事で焼失しましたが、膳椀一式を納めた箱のみが難を逃れた現存していると報告されています。その食器類のは「ナ組」と書かれており、中村の膳椀を意味するものと考えられています。

### ④ 赤堀の組合

赤堀の膳椀蔵は、西ヤツ・中ヤツ・東ヤツ・山王前のそれぞれに膳椀組合があり、共同管理していました。しかし、成立から解散にいたる過程などよく分かっていません。

#### 大正組

赤堀の膳椀組合の中で、最後まで膳椀蔵が残っていました。膳椀蔵は、中ヤツの奥の道沿いにありましたが、最近取り壊されました(写真3)。



写真3 大正組の膳椀蔵

大正組の名簿には、中ヤツの高橋イッケとその分家筋30軒と栗原イッケ・乙幡イッケ・波多野イッケの名前があると報告されています。

### ⑤ 萩ノ尾の組合

萩ノ尾には、椀蔵が4ヶ所あったことが、今

回の聞き取り調査で分かりました。それぞれ、乙幡家・奥住家・波多野家といったイッケを中心に組が成立したようで、時代とともに近所の家が加入して組合の管理運営を行っていました。

乙幡家の椀蔵は、土蔵造りで梅畑の一角に建てられていましたが、かなり前に取り壊され、膳椀類を仲間内で分配したそうです。座布団などは、山王の自治会館で使われたそうです。

奥住家の椀蔵は、個人の庭の一角に建てられていました。こちらも土蔵造りであったことがわかっています。

波多野家の椀蔵は、個人の庭の一角に建てられていましたが、数年前に取り壊され、膳椀類を仲間内で分配したそうです。それまで長い間、自治会行事などで使用されていました。

### ⑥ 原山の組合

原山地域には、西から観音寺組・馬場組・中(西)組(一組・二組)・向組・橋場組と5つのオヤグミがありました。

オヤグミ(親組)とは、江戸時代の五人組制度の名残と考えられる組(仲間)のことで、それが組合に変化をしていったと考えられます。

戦後に、中組と向組が合併して立正組へと組合名が変わったり、膳椀蔵の場所が移動したりしていますが、どの組合も昭和40年代くらいまでは利用されていました。

#### 観音寺組

観音寺組の名前は、西側に観音寺(現・観音堂)が所在していることに由来しています。

観音寺組の膳椀蔵は、何度か移築されており、昭和25(1950)年に個人宅の敷地内に再建され

たものが、近年まで存在していました。取り壊しの時に、道具類は組合の仲間で分配されています。平成23年に、膳椀組合の関連書類(8点)一式が、文箱と一緒に寄贈されました(写真4)。

最も古い記録は、「昭和貳年 記録簿」(1927)で、帳面には、組内規則として使用料や管理等が6項目記載されており、その後、昭和9(1934)年、11(1936)年の2回にわたり4項目加筆されており、その時代の変化をうかがわせる内容となっています。また、地代の支払い、椀、座布団などの購入記録のほかに、火鉢は材料を購入し大工に作らせていることや湯桶は破損しやすいのか何度か修繕を行っていることが記録され、道具類の購入は所沢を中心に購入していることが分かります。

『昭和十一年 重物寄付金簿』(1936)には、15名が10~30銭、新規加入者が3名10円を納めており、3月に「特上尺一膳参十人分」4円50銭、「祝樽一組一升・塗物」6円50銭、「飯台一組・木地物」12円で購入したことが記録されています。

戦後は、昭和24(1949)年から昭和49年までの記録がみられます。「収入簿」には、膳椀蔵の管理費のほかに、宴席に出される料理の材料名(人参・牛蒡・ほうれん草・豆腐・小麦粉など)に加え製麺費が記録されており、煮物・うどんなど必ず作る料理があったことが分かります。

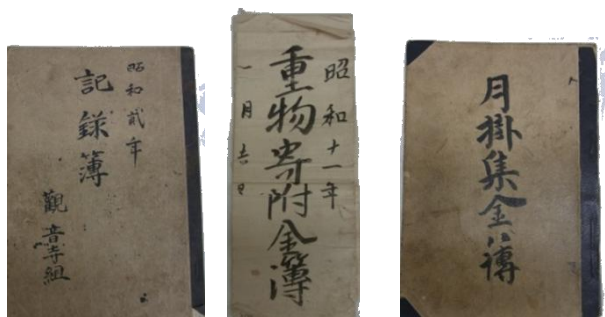


写真4 観音寺組の記録簿類

### 馬場組

馬場組の名前は、旧道のすぐわきに、狭山丘陵から流れ込んだ水を貯める井戸があり、馬の水飲み場としての役割も果たしていたようで、その名が付いたといわれています。道具類の一部は、組合の仲間で分配された



写真5 馬場組の膳椀蔵

そうですが、膳椀蔵は、原山の地蔵尊の脇に現存しています(写真5)。

### 中(西)組(一組・二組)

中組は、明治期には西組といわれていました。当時、原山を西と東に分けていていた当時の呼び方だそうです。

今年の春、原山の渡辺善一郎氏より中(西)組の資料を当館に寄贈して下さいました。それらは、道具類を組合の仲間で分配した時に譲り受けたもので、明治期から昭和初期にかけての中(西)組の様子を伺い知ることができます。

江戸時代末期の有田焼・染付大皿が収められた箱書には、「原山西二組 明治十九年」と記載されており、原山の膳椀組合の文字資料として一番古いものです。

昭和8(1933)年10月に新調された文箱には、「原山中組」の文字が墨書され、明治43年から昭和23年までの隣組に関する文書15点が収められていました。膳椀組合のみの記録はありませんが、『月掛集金簿』(昭和17(1942)年~昭和23(1948)年)一部その内容が含まれている箇所があります。組名の変化ですが、明治44年の「決算報告簿」では、明治43(1910)年~大正8(1919)年までの「西二組」の名前で記録が記載され、昭和8(1933)年には、組合名が中組になっています。昭和初期に中組に名前を変更したことが分かります(写真6)。

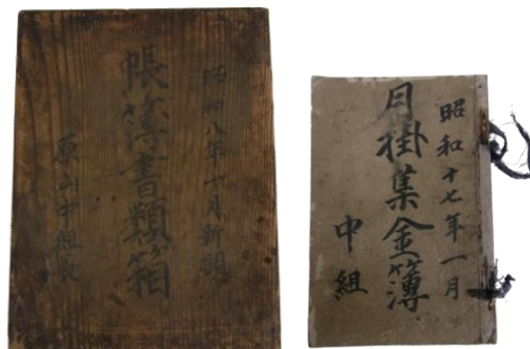


写真6 中組の文書箱と記録簿類

### 向組

向組の膳椀組合の成立や膳椀蔵については、よく分かっていません。

### 立正組

立正組は、昭和25年に原山の自治会が二つに分かれた時、中組と向組が合併して誕生しました。膳椀蔵は、個人の家の一隅にありました。

### 橋場組

橋場組は、原山の西南部を中心とする膳椀組合です。近年まで、組合としての活動があり、膳椀の使用料は、その都度の徴収で、会計担当者が帳面と鍵を管理していました。

現在も、道路脇に膳椀蔵が建っていますが、

もともとは、やや北側の個人宅の庭の一角あり、その後、移築されました。膳碗蔵の壁には、再建の時に寄附をした方々の名前が今でも掲げられています（写真7）。

ここに収められていた皿や碗類一式は、昭和56（1981）年8月、当館に寄贈されました。

碗や皿などの木箱の箱書を見ると一番古いものから、「明治26年」「大正元年」「昭和元年」と墨で記載されているので、何度かにわたって道具類を新調していることがうかがえます。

また、七つ鉢の底には「商標㊟南伊勢山田市国産漆問屋 二見光之助」と漆書きがあり、同じような報告が府中市の本町の膳碗倉資料（五枚重ね切溜）でも報告されています。多摩地域での紀伊半島を中心とした漆の山地からの販路も、開けていたことが想像できます。

皿類は、佐賀県・有田焼、愛知県・瀬戸美濃焼など西日本を中心とした窯で作られているものが入ってきており、江戸時代以降に開拓された新河岸川を経由した販路で、所沢周辺の商店より購入したものと考えられます。

武蔵村山周辺では、特に所沢へ出向いて品物を購入することが多かったようです。道具類の中には、東京へ出た際に、古物商から直接購入し、碗蔵に収めたという言い伝えのある江戸時代末期の磁器類もあります。

### ⑦ 神明ヶ谷戸の組合

神明ヶ谷戸は、東組・中組・西組・日陰組の4つの膳碗組合がありました。

碗蔵をジュウモツゴヤ（什物小屋・汁物とあてることが多い）とも呼んでいました。残念ながらいずれも現存していません。

#### 東組

東組についての記録はなく、詳しいことは分かりません。ジュウモツゴヤは、個人宅の敷地内にありましたが、早い時期に撤去してしまったと伝えられています。

#### 西組

西組のジュウモツゴヤは、個人宅の敷地内にあり、鍵は同家で管理をしていました。平成17（2005）年5月に撤去され、道具類の一部と文書類一式が当館に寄贈されました。

『明治四十一年十一月 備付品記録簿 西組』



写真7 橋場組の膳碗蔵

には、明治41（1908）年11月買い揃えた膳碗類に、大正4（1915）年、大正7（1918）年、大正13（1924）年、昭和17（1942）年の4回道具類を買い足している記録があります。個別に使う碗類は30人前揃いが基本ですが、茶碗は50人前揃えていました。

戦後の『什物使用者収支記録簿 神明西組』（昭和28年4月～昭和43年）には37名の名前と規約・当初3カ条（後に4カ条追加）の7カ条が記載されており、「西組内居住者は希望により随時加入出来る」として、その後8名が新規加入しています。また、『・・・使用料一回二付キ金式百円、新規加入者金式百円・・・』（のちに参考百円となる）と集金していた使用料が、昭和32（1957）年3月以降は廃止とすることが規約に載せられています。膳碗の使用については、昭和28～31年の間に婚礼・葬儀ともに年1回程度行われ、膳碗類が貸し出されています。また、膳碗類の補充は、8回行われ、購入先は、主に所沢市内の個人商店より購入していますが、瑞穂町や立川市や、同じ組内の商店からも取り寄せています（写真8）。

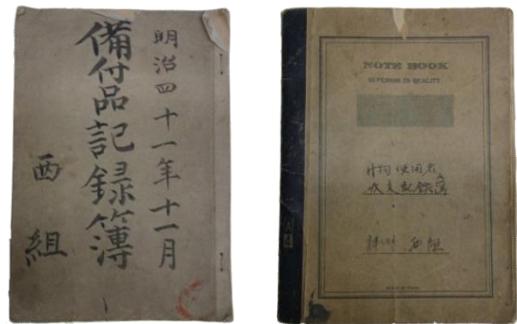


写真8 西組膳碗組合の記録簿

ジュウモツゴヤの手直しも行っており、柱には、「昭和七年貳月新築」と墨書（写真9）が残され、昭和34（1959）年、修理費としてトタン・板・釘などを購入しています。昭和39（1964）年鍵を新調し、屋根や壁など劣化した部分を新調しながら大切に使われていたことが伺えます。

膳碗類の利用が、年々少なくなっていく中で座布団などの調度品は、膳碗倉が取り壊わしになるまで、使用していたとのことでした。



写真9 西組の膳碗蔵と墨書が見られる柱



## 中組

中組の詳しいことは、分かっていません。ジュウモツゴヤは、早い時期に撤去したようです。

## 日陰組

日陰組のジュウモツゴヤは、個人宅の角地にあり、座布団・椀・膳・湯桶などが揃っていたようですが、昭和50(1975)年ごろに撤去されたとのこと。聞き取り調査によると、帳面などはつけず、毎年元日の日陰組の新年会の際に、前年使用した家からその使用料を含めて年会費を徴収したと記録されています。

## ⑧ 入り・谷津・鍛冶ヶ谷戸の組合

この地域は、組合よりもジルイやイッケを中心とした結びつきによって共同の道具の管理をしていたようです。当初は、個人宅の庭の一角に設置されていたようです。

現在では、各地域の自治会を中心として、入りは天満宮、谷津は熊野神社、鍛冶ヶ谷戸は八坂神社の敷地の一角に、倉庫が置かれ、共有財産を管理しています(写真10)。市史編さんの調査では、鍛冶ヶ谷戸の倉庫の中に、「明治三十年下組」や「昭和六年 三月新調」などと箱書きされた道具類が大切に保管されていました。



写真10 入り(左)・谷津(中)・鍛冶ヶ谷戸(右)の倉庫

## 9. まとめ

武蔵村山周辺の各自治体でまとめられている記述をみると、多くの組合の成立時期が、明治初期から大正年間に確立しています。江戸時代の五人組体制が崩れ、イッケやジルイといった血縁集団を中心とした小さな共同体から成立した組合がほとんどです。

その後、血縁集団に関係なく、近隣の家々(地縁集団)も加入し、組合の共有財産も増え、管理も確立されていきます。文書資料からは、組合の規則(会則)も定め、状況に応じては、内容が改訂され、祝儀・不祝儀を催さなくてはならない家の手助けをし、年に一度の集まり(総会・講)では、前年度の報告や新年度の協議を行いながら、親睦を深めている様子が見えます。

膳椀類の備品記録や購入記録には、入手した年月日が丁寧に記録され、箱書きにも墨書され

ていますが、何処で生産されたものを何処から入手しているのか分かっていません。

入手経路として、江戸時代から確立されていた江戸・青梅・引き又諸街道による東西流通に加えて、養蚕が盛んであった村山地域は、昭島・八王子方面からの人の動きもあり、南北の流通経路があります。

周辺地域の記録の中には、羽村市の竹の花組では、昭和初期に東京へ買い付けに出向いており、漆器類の生産は、紀州産や会津産が主流であること、漆器問屋で購入するメリットと近隣の町や行商から購入することでのデメリットが報告されています(文献3)。

また、東大和市の内野組では、所沢市の商店で見本を見て膳椀類を購入している記録されています(文献4)。僅かな資料ですが、組合員より集金した組合費をより有効に使うとする気遣いが伺える資料もあります。

明治期に確立し存続していた組合による相互扶助活動は、昭和30年代、イエを中心に行っていた慶事が、公民館や専門会場の進出により外で行われる様になり、昭和40~50年代には、弔事も外で行われることが増え、その必要性も薄れ、姿を消していきました。

その実態について、当時の様子を語ってくださる方々も年々数少なくなっています。道具類や文書資料では分からない、人の動きや習慣やもてなし方など、伺っておかなくてはならない内容が多く、早急に調査・記録を行わなくてはならない時期にきています。つい半世紀前の歴史もなかなか復元できないのが現状です。

資料館としては、これからも膳椀組合や膳椀蔵に関する情報をお持ちの方々からのお話を伺っていきたくと思っています。

最後に、今回企画展を開催するにあたって、多くの市民の方々のご協力を賜りました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

ご協力をいただいた方々(敬称略・五十音順)  
石川伊三郎・内野 昭・金井和子・近藤春香・清水 直・高橋正志・高橋美千代・外立ますみ・比留間正誼・宮崎正男・山口昭男・渡辺岩子・渡辺善一郎

主な引用・参考文献

1. 武蔵村山市 『武蔵村山市史調査報告書「武蔵村山の民俗」その二、その三、その四』1997~1999年・『武蔵村山市史 民俗編』2000年
2. 関東民具研究会『南関東の共有膳椀-ハレの食器をどうしていたのか-』1999年
3. 羽村町『羽村町史』1974年
4. 東大和市『東やまと生活と文化』1983年
5. 関東民具研究会編著『多摩民具辞典』1997年
6. 財たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第49号1987年

# 平成 23 年度の主な事業報告

## 1 特別展「武蔵村山の弥生時代」

武蔵村山市及び狭山丘陵周辺地域の弥生時代にスポットをあて、本市及び関係機関より借用した弥生時代の遺物・写真などを展示した。同時に『平成 23 年度特別展解説書「武蔵村山の弥生時代」』（定価 300 円）を発行した。

\*展示期間：平成 23 年 10 月 8 日～12 月 18 日



## 2 企画展「峰の大幟～飾り彫刻を中心として」

江戸時代後半から明治時代にかけて、神社の祭礼を知らせる大幟が神社参道の入口や街道辻に立てられ、その大幟を掲げる竿を象鼻系木鼻簀で支えた。その簀に素晴らしい飾彫刻がしてあり、その簀の企画展を開催した。

\*展示期間：平成 23 年 5 月 21 日～6 月 19 日

## 3 夏休み子ども展示「武蔵村山・植物ものがたり」

武蔵村山市の植生を紹介しながら、道端で見られる植物を中心とした標本を公開展示し、標本の作り方や顕微鏡などを使い植物の観察

方法などを紹介した。

\*展示期間：平成 23 年 7 月 16 日～8 月 31 日

## 4 ミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」

武蔵村山では、昭和 20 年 4 月に 2 回の空襲被害にあった。それらの残された記録や戦争資料を展示した。

\*展示期間：平成 24 年 3 月 10 日～3 月 20 日

## 5 子ども体験教室「植物のはっぱを観察しよう」

- (1) 期日：平成 23 年 8 月 6 日（土）
- (2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館
- (3) 講師：高橋 健樹(市学芸員)  
石川 悦子(市学芸員)

## 6 歴史講座「弥生時代を語る」

- (1) 期日：平成 23 年 11 月 26 日（土）
- (2) 会場：武蔵村山市立歴史民俗資料館
- (3) 講師：石川 和明氏  
(日本考古学協会会員)

## 7 自然観察会「早春の鳥たち」

- (1) 期日：平成 24 年 3 月 10 日（土）
- (2) 会場：都立野山北・六道山公園
- (3) 講師：鈴木 君子  
(日本野鳥の会 奥多摩支部)

## 8 年中行事展「端午の節供・七夕飾り・正月飾り・桃の節供」

それぞれの季節や時期に合わせて、武蔵村山市立歴史民俗資料館で年中行事展を開催した。

## 9 資料館入館状況

月	区分	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
				人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
4		28	1,535	748	48.7	787	51.3
5		29	1,848	660	35.7	1,188	64.3
6		20	1,148	659	57.4	489	42.6
7		29	1,840	664	36.1	1,176	63.9
8		29	960	438	45.6	522	54.4
9		28	862	325	37.7	537	62.3
10		29	1,791	420	23.5	1,371	76.5
11		28	1,426	591	41.4	835	58.6
12		25	961	431	44.8	530	55.2
1		27	854	365	42.7	489	57.3
2		27	1,932	780	40.4	1,152	59.6
3		29	1,227	638	52.0	589	48.0
合 計		328	16,384	6,719	41.0	9,665	59.0

## 狭山丘陵南麓西側の自然 part 3 - 晩夏から晩秋の花 -

今回は、8月下旬から11月上旬ごろに見られる狭山丘陵の植物と、色違いの花やよく似た花をご紹介します。( )内は撮影時期です。植物名は図鑑等で確認しておりますが、間違いやご不明な点がありましたら資料館までご連絡ください。また、詳細な撮影地点につきましては、**野草の乱獲・盗掘を防止**するため、割愛させていただきました。(写真・吉田 政一)



**キンミズヒキ**  
(8月中旬)



**コマツナギ**  
(8月中旬)



**ヤクシソウ**  
(9月上旬)



**ツリフネソウ**  
(9月下旬)



**ウバユリ**  
(8月中旬)



**スズメウリ**  
(9月上旬)



**ノハラアザミ**  
(9月上旬)



**ナギナタコウジュ**  
(10月上旬)



**キツネノカミソリ**  
(8月中旬)



**ナンパンギセル**  
(9月上旬)



**アキノキリンソウ**  
(9月中旬)



**ツルニンジン**  
(10月上旬)

## この違い、わかりますか？



**コバノカモメヅル**  
(9月上旬)



**シロバナカモメヅル**  
(9月上旬)

ここでは、この時期に狭山丘陵で見られる植物の中から

- ・同じ種類だが花の色が違うため、別の名前がつけられたもの

**コバノカモメヅルとシロバナカモメヅル**

- ・花の色が、通常と少し違うもの

**ゲンノショウコ、アキノタムラソウ**

- ・同じ科で、少し似ているもの

**ツルリンドウとリンドウ**

- ・同じ科で、とても似ているもの

**コウヤボウキとキッコウハグマ**

をピックアップしてご紹介します。



**ゲンノショウコ**

上：通常（8月中旬）  
下：赤花（10月中旬）

**アキノタムラソウ**

上：通常（8月中旬）  
下：白花（8月中旬）

**上：ツルリンドウ**

（8月中旬）

**下：リンドウ**

（11月上旬）

**上：コウヤボウキ**

（8月中旬）

**下：キッコウハグマ**

（10月上旬）

発行：武蔵村山市立歴史民俗資料館

〒208-0004 東京都武蔵村山市本町 5-21-1

TEL 042 (560) 6620/FAX 042 (569) 2762

Mailアドレス mmc-reki@blu.m-net.ne.jp

HPアドレス <http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokan/index.html>